

て顕現し、以後進化を重ねて今日見る生物界となつた。
 この大生命は、人類に課するに、文化の創造をもつて
 した。歴史をかえりみると、それは、人類の文化創造
 の足跡ともいえる。古今東西、幾多の民族が興亡をくり
 返しているが、その興るのは文化創造の使命を担つた時
 であり、その亡ぶるのはその使命の終つた時である。大
 生命は、冷厳に文化の創造を基準として、民族の興亡を
 つかさどっている観がある。

ここで文化財についてもう一度考えてみたい。私が前
 回のべた文化財は広義のものであるが、ここにいう文化
 財は狭義のもので、文化財の中のエキスとも言うべきも
 のである。文化財は一度失つたら、再び手にすることは
 出来ない。文化財保護の大切なゆえんである。

私たちは、昨年未三の九檜門の修復に取り組んで今日
 に至つた。

檜門は寛永以後の、佐伯藩政を語る貴重な文化財であ
 る。そういう認識のもとに事を進めたのであるが、幸い
 に各方面の理解協力を得て、修復も工程の八分を終り、
 竣工の日も近い。

檜門の修復を私たちの文化財の探究と、その保護保存
 の一里塚として、さらに深く、広く、温故知新の旅を続
 けたいと念じている。

(おわり)



報告

三の丸檜門の修葺について

保存会事務局長 羽 柴 弘

昨年十一月十二日起工式挙行、引続いて
 着工した檜門の工事は、順々進み、慎重に

復元の作業を始めた。施工者曾宮建設の誠実入念な解体
 瓦一枚一枚の洗いあげ、値段を問わない垂木や檜皮の使
 用、特別な建造物であるが故に、慎重に復旧工事をすす
 め、旧暦十八日、見事に瓦の葺上げまで終つた。明後以
 来百年余、間に合わせの小修理ですまし、老朽の姿見る
 べくもなかつた檜門が、今日新春の陽光の下に、毅然と
 堂々の威風を示している。

この間、連日寒風の中に身をさらし、工事の監督指導
 に当つた清田義雄会員のおつたことを知らぬ風ならぬ。
 その時、その場で適切な督励と助言を与えてくれたこと
 は、保存会としてありがた限りであった。特記して会
 員の皆さんに報告したい。

工事は、今、冬休みの格好で中断している。それは瓦
 土の乾燥を待ち、あるいは日きびしい寒気による、漆喰の
 凍結のおそれや、作業の困難さを考へてのこと、つま
 り確実・入念な施工を願つてのことである。

一か月前ほど休んだ上で、二月に入つたら左官による
 漆喰工事が、二月一杯かかる見込み。檜門内部の補修の
 木工作業もはじまるが、この方はすぐ終るとのこと。外
 に付帯工事も考へているが、いざにしては二月一杯で
 出来あがる予定である。

二月四日が立春、一日と暖かさを増す、日も長くな
 る。早春の陽にかがやくような、まっ白く仕上げられる
 漆喰作業の日はかどりが、目に見えらうようである。

三月の上旬、うららかな夜日に竣工の式を挙げ、修復工
 事の完了した時点で、毛利家から佐伯市に、この檜門を
 寄贈していただく——そう取り進めるつもりである。

(付記)

史談会員の檜門修復工事についての御寄付は、なるべく二
 月中頃までに保存会事務局の私へ、郵便振替可。